



Title	テンス, アスペクトの意味組織についての試論
Author(s)	森山, 卓郎
Citation	語文. 1984, 44, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テンス、アスペクトの意味組織についての試論

森 山 卓 郎

一、はじめに

本稿の基本的な目標は、現代日本語におけるテンス、アスペクトの意味の体系を整理する、だてをさぐることにある。

その際、大きくわけて二つのことが問題になるように思われる。問題の第一は、シテイル形のあらわす意味の類型である。シテイル形がどんな意味をあらわすかということについては、金田一（一九五〇）以来、基本的に次の三つが挙げられてきた。

- (i) 動作、作用が進行中であること
- (ii) 動作、作用が終わって、その結果が残存していること
- (iii) 単なる状態

このうち、(iii)の意味については、スル対シテイルの対立を有さない場合であるので、本稿では一応、とりあげないことにする。

その後、(i)と(ii)の意味について、藤井（一九六六）吉川（一九七一）などの研究をへて、工藤（一九八一）において、次のように位置づけがなされた（五三、五四べ）。

(i)の基本的な意味 「動きの継続」へは筆者による。✓

〈主体の動作の動詞〉

(i)の派生的な意味 「反復」

〈動詞の区別なし〉

(ii)の基本的な意味 「変化の結果の継続」

〈変化の動詞〉

(iii)の派生的な意味 「現在有効な過去の運動の実現」

〈動詞の区別なし〉

こうした位置づけの根本には、奥田（一九七七）におけるスル対シテイルの意味の対立という考え方があり、各々、派生的な意味では対立が弱まっていると言われる。しかし、まず反復において、スル対シテイルの対立が弱まるということと、「現在有効な過去の運動の実現」（経歴）において、スル対シテイルの対立が弱まるということとは、同じレベルであるかどうか問題があるように思われる。例えば、

①彼は毎朝散歩する。／散歩している。

は、そのままで交替できるが、一方、

②彼は去年結婚している／結婚する。

は、そのまま交替できないと思われる。②では、「結婚している」に対比されているのが「結婚した」であって、アスペクトの問題に

テンスの問題が紛れこんでしまっているのである。これをもって、②も①と同じようにスル対シテイルの対立が弱まっていると言うわけにはいかないと思われるがどうであらうか。

また、変化の結果の継続という意味も、さらに考えれば、

③彼はいすにすわっている。

④彼は死んでいる。

のような違いがある。⑤も⑥もそれぞれ、「いすにすわった」「死んだ」という変化の結果の継続をあらわしているが、⑤では、動詞の語義自体に、変化の結果を持続させる意味(維持)が含まれていて、⑤三時間すわる
ということができるのに対し、⑥では

⑥三時間死ぬ

などということもできず、動詞は、非可逆な(永続的な)変化がおこることだけをあらわしている。このように、変化の結果の継続という意味の中にも、動詞の語義そのものがどれだけの事態をあらわしているか、という点で、違いがあるのである。

以上がシテイル形の意味に関する問題であるが、第二の問題は、テンス、アスペクトの意味体系をどう整理するかということである。例えば、シタという形態は、アスペクト的には完成相(スル形)をあらわし、テンス的には過去(タ形)をあらわす、などと言われるが、こうした形態の位置づけは、奥田(一九七七)鈴木(一九七九)(一九八三)などの一連の研究によって、かなり明らかになった。しかし、より本質的に、完成相なら完成相とはどういうものか、継続相なら継続相とはどういうものか、といった点に関しては、いまひとつ明確な規定がなされていないように思われる。例えば、完成相

(スル形)の意味に関して、「動きをひとまとまりのものとして捉える」とか「動作をまるごとさしだす」などといったところの、意味的な規定をすることは難しいと思われる。考えようによっては、

⑦すでに一度授業を休んでいる。

といった経歴の意味でさえ、以前のこととして「動作をまるごと」捉えていると言えなくもない。結局、「まるごと」「ひとまとまり」とはどういうことかという問題は残ると思われる。

また、時の成分が何を示すのか、という問題もある。例えば、

⑧彼は先月に結婚していたそうだ。

における「先月」は、出来事の時(結婚の時)をあらわすのに対し、⑨彼は先月には、結婚していたそうだ。

という文では、時の成分「先月」は、出来事時でも発話時でもなく、いつのこととして事態を捉えるか、という時をあらわしている。こうした、時の設定についても体系的に整理する必要があると思われる。

以上、これまでの研究において問題となると思われることを、簡単にまとめてみた。

なお、断っておくが、本稿では、主文末のテンス、アスペクトの対立のある場合を扱う。主文末以外では、テンス、アスペクトの区別そのものから問題になってくるからである。

二、シテイル形の意味

はじめに、シテイル形の基本的な意味は、これまで言われてきたように、進行中と結果の状態との二つに大別できる。

進行中の意味は、出来事が時間的に展開していく側面をシテイル

形が捉えた時の意味である。進行中の意味が実現するためには、出来事が展開していく時間である過程（持続過程）がなくてはならない。その場合、動詞のあらわす動きそのものが過程をもっている場合と、動きが反復することによって出来事全体として過程をもつ場合とがある。シテイル形の意味としても、この二つの場合をわけて前者を、動きそのものの継続、後者を、反復とそれぞれ呼ぶことにしたいと思う。

例えば、

⑭彼は歩いている。

は、動きそのものの継続であるが、

⑮毎年多くの人ががんで死んでいる。

は、反復である。反復の意味は、動詞の素性に直接かわることなく実現する。なお、反復の意味の場合、特に習慣的な意味の時に、スル対シテイルの対立が弱まるが、反復という意味すべてにおいて、スル対シテイルの意味が弱まっているわけではない。例えば、

⑯友人が次々と結婚している／する。

のように、「次々と」による反復などでは、スル対シテイルの対立が弱まっている。

次に、結果の状態の意味について考えたいと思う。結果の状態の意味は、出来事がおこったあととあり方をシテイル形が捉えた時の意味である。結果の状態の意味には、結果の残存という意味と、経歴という意味との二つがある。

結果の残存という用語は、変化の結果の継続とも呼べるもので、文字通り、主体または客体の変化の結果が残存しているという意味である。残存という以上、とりあげた時における変化物のあり方が

決定される。動詞は、変化を含むものでなくてはならない。例えば、

⑰戸がしばらくあいている。

は、主体「戸」が、「あく」という変化の結果、問題となっている時（ここでは現在）において「あいている」のであるし、同じく、

⑱彼は戸をしばらくあけている。

では、客体「戸」が「あけた」という変化を含む動作によって「あく」、現在において「あいている」のだといえる。主体であれ、客体であれ、変化の結果はそのまま残っていて、とりあげた時におけるあり方は決定されている。（この点が経歴の意味と違う。）

結果の残存の意味は、さらにその結果の残存期間が設定できるかどうかによって、三つの場合に分けることができる。例えば、

⑲彼はすわっていた。

⑳彼はそのことを忘れていた。

㉑彼は死んでいた。

という三つの文は、それぞれ、結果の残存をあらわしていると言える。しかし、㉒では、「すわり続ける」が可能ならえ、

㉓しばらくすわった。

のように裸の動詞と期間成分を共起させることができ、変化の結果の残存する期間が設定できるばかりか、それが、動詞の語義の内部に含まれているとみられるのである。この場合、変化の結果が維持されているという意味で、結果の維持と呼ぶことにしたい。結果の維持は、出来事のあったあとを示すとはいえず、ある意味で、結果の維持を続けるという進行中の色彩を持つこともある。

一方、㉔のような文は、「忘れ続ける」とも言えないうえ、

⑭ 彼はそのことを長い間忘れた。

とは言えず、動詞の語義としては、結果の残存する期間を含んでい
るとは言えない。つまり、変化がおこることだけが意味的にあらわ
されていて、語義の中には、変化の結果を維持する意味は含まれて
いない。しかし、

⑮ 彼はそのことを長い間忘れていた。

と言うことはできる。すなわち、結果の残存状態がうちきられるこ
ともありうるのである。このような意味を、結果の維持に対して、
結果の半可逆的残存（全く可逆的な変化とは、状態のうしろきりを語
義内部にもっている、結果の維持の場合である）と呼ぶことにする。
他方、⑯のような文は、もちろん「死に続ける」と言えないし、

⑯ 彼は長いこと死んだ。

とも、

⑰ 彼は長いこと死んでいた。

とも言うことができない。これは、変化の結果が永続的に残存する
ことをあらわすのであって、結果の残存が持続期間をもつことがな
い。この場合、次にのべる経歴の意味に近くなる。例えば、

⑱ 彼は去年死んでいる。

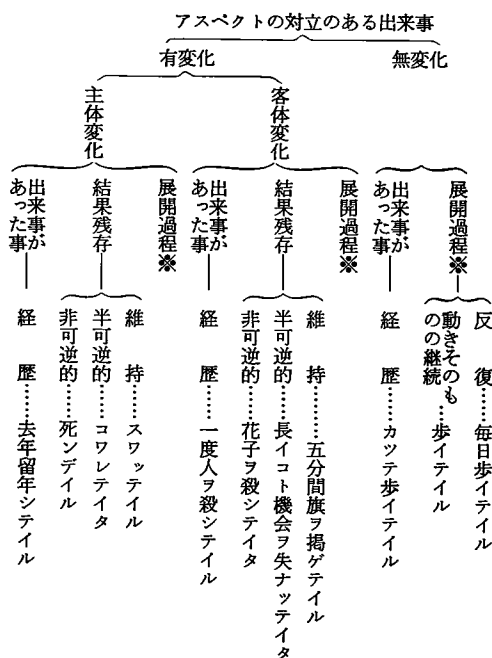
のような場合が、経歴の意味であるが、⑰との違いは、以前のこと
を示す成分があるということだけである。永続的な変化をあらわす
出来事は、経歴の意味でも、以後のあり方全部を規定してしまうか
らである。一応、可逆性という観点からみて、結果の非可逆的残存
と呼ぶことにする。以上、結果の残存の意味三種について考えた。
最後に、経歴の意味について考える。経歴の意味とは、出来事が
かつてあったということだけをあらわし、とりあげている時のあり

方を直接規定することはない。例えば、

⑲ 彼は去年留年している。

と言え、そういう経歴があったというだけの、正確には、以前あ
った出来事を、問題となっている時において有効なものとして捉え
ているというだけの意味である。経歴の意味は、出来事がおこりさ
えすればいいのであるから、アスペクト的な対立のある動詞ならど
んな動詞でも、この意味を実現することができる。

以上、本節で述べたことをまとめると、次の図のようになる。変
化のありかたに関しては、主体に変化がある方が、結果の状態で解



② 例はわかりやすくするため、副詞を加えたり、テンスをかえたりしてある。

・出来事によつては、展開過程を持つことも持たないこともある。

・維持、半可逆的の三つは、結果の残存の意味である。結果の残存と経歴とをまとめて、結果の状態と呼ぶ。

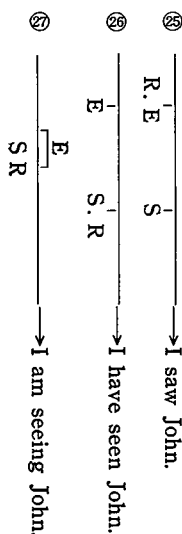
・非可逆的残存と経歴とは中和的である。

訳されやすいのに対し、主体に変化のない出来事は、その逆であると言ふことができるが、条件によつて、交替現象がおこる。具体的現象は別稿に譲る。以上、シテイル形のあらわす意味を、全体として位置づけた。

三、アスペクトの対立とはなにか

ここでは、スル形、シテイル形の意味を、さらに対立という観点から相互に位置づけたいと思う。その際、アスペクトの意味構造をまとめて考える必要がある。

アスペクトの意味構造をまとめて考えることのできる体系には、ライヘンバッハ(一九四七)のSRE体系がある。Sとは発話時、Rとは言及時、Eとは出来事時で、この三つの時の関係から、テンス、アスペクトを考えようとする体系である。例えば、単純過去、現在完了、現在進行は、それぞれ、次のようにあらわされる(三〇二)。



この体系は、明析なため、多くの研究が、利用しているようである。⁽³⁾しかし、言及時とは、どのように規定できるのであろうか。②⑤のような単純過去などでは、言及時ということを考える必要はないと思われる。ほか、時の成分が何をさすのか、ということもいちがいに決めることができない。例えば、

②⑧ 彼は先月末に退部していた。

では、時の成分は、出来事時をさしているが、

②⑨ 彼は先月末には、退部していた。

では、時の成分は、言及時、すなわち、いつのこととして、出来事を把握するかという時をさしている。

また、S、R、Eのそれぞれの時間的な性質も明らかではない。

出来事が、進行中の場合にだけ、②⑩のように、期間として捉えられるといふのはおかしい。そうすると、

②⑩ 二時から三時まで遊んだ

②⑪ 二時から三時まで遊んでいた。

の二つの違いなども、どうあらわされるのか、疑問である。そもそも、Rとは、一時点なのか、期間なのか、も問題になってくる。

そこで、まず、進行中の意味のシテイル形とスル形との対立の意味を考えてみる。

②⑫ 彼は三時ごろカレーを食べた。

②⑬ 彼は三時ごろカレーを食べていた。

どちらも「カレーを食べること」が、「三時ごろ」という時間に接しておこったという、ことからの大まかな事実関係に大差はない。けれども、意味そのものには、もちろん、大きな違いがある。

まず、②⑭では、「三時頃」という、ある広がりをもった時間のうち

に、「カレーをたべること」をはじめ、おわっている、と一般に解釈されるのではないだろうか。ところが、③では、「三時頃」という時間に、「カレーを食べる」ことが進行中であるという関係がなりたっていて、「三時頃」は「カレーを食べる」という過程の一つの部分集合的な時間と見られるのである。そう解釈しなければならぬ理由は、少しはなれた別の時点、例えば、「二時ごろ」における真値をもとめることで明らかになる。すなわち、③では「二時頃」に關しては、「食べる」とはおこなわれていなかったというように解釈されるのに対し、③では、「二時頃からずっと」食べることが続いているそのまま解釈できる。つまり、「三時頃」という時間において「食べる」ことが過程中であるということがあらわされているのであって、それ以前、以後も出来事が過程中であるという捉え方になるものと思われる。一方、④では、「食べる」ことは、「三時ごろ」という時間内に完結しているという捉え方がなされているのである。

こうした違いを図示すれば、



とあらわせるのではないだろうか。すなわち、③のようなスル形は、ひとまとまりの出来事をあらわし、その両端が切りとられた区間、つまり、閉的区間をなすのに対し、④のようなシテイル形では、出来事がまだ続くのであり、出来事の時間的な両端が、切りとられないという開的区間をなすのである。

スル対シテイルは、まず、進行中の意味において、閉的区間対開

的区間というとりあげ方の違いであると言えそうである。⁽⁶⁾⁽⁷⁾

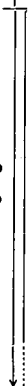
次に、シテイル形が、結果の状態の意味の場合について考える。結果の状態という意味は、出来事時とは別に、いつのこととして事態を把握するか、という時が問題になる。これを言及時と呼ぶことにする。⁽⁸⁾言及時において、どんなあり方か、ということをとりあげるのが、結果の状態の意味なのである。言及時は、出来事時よりあとということになる。例えば、

③ 彼は先月末には、退院していた。

という文では、時の成分「先月末」は、発話時でも出来事時でもなく、いつのこととして事態を把握するか、という言及時をさしている。⑤の文のシテイル形が、結果の状態の意味であるという時、言及時において、結果の状態の意味となると言わなければならないであろう。

言及時における事態の捉え方は、どうなっているか、まず、結果の残存の意味をとりあげて考えてみることにする。⑤の文の意味的な構造は、次のように図示することができる。

⑤ 〈退院シテイル〉状態



退院の時(出来事時)先月末(言及時)

すなわち、ここでも、事態をとりあげる言及時は、出来事のあとのあり方の内部の区間として考えられるのである。「先月末」には、すでに「退院後」の状態であったということは、その前後のいくらかの時間においても「退院していた」ということを否定しないのである。ここでとりあげた⑤の例は、結果の半可逆的残存の場合であ

るが、結果の維持の場合、結果の非可逆的残存の場合も、同じように説明することができる。例えば、

③⑦彼は今、ねている。

は、結果の維持の意味であるが、

③⑧〈ねているという維持〉

寝た時(出来事時)

今(言及時)

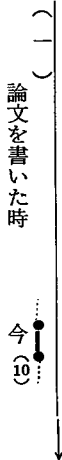
のように考えられるであろう。この例では、発話時が言及時を指している。(後述するが、言及時があれば、言及時と発話時との関係が、テンスを決める)

次に、経歴の意味について考えるが、経歴の意味は、出来事があったかどうか、ということだけを問題にしている点が、結果の残存と違っている。しかし、経歴の意味では、かつて出来事があったというあり方の内部に、言及時が位置づけられるという点では、同じように説明できる。例えば、

③⑨彼は去年論文を書いている。

は、経歴の意味であるが、同じように、

④⑩「論文を書く」経歴のある状態



と説明することができる。同じように、開的区間対閉的区間の対立なのである。

ここで、言及時の問題を考えてみる。例えば、

④⑪戸がずっとあいていた。

は、言及時をあえて言うなら、「今まで」という期間である。ここ

で、結果の維持、結果の半可逆的残存ということが大きな意味をもっている。というのも、結果の維持、結果の半可逆的残存という意味は、結果残存の期間を設定することができるが、言及時が特定されない場合、その期間内の任意の時を示すことになり、結局、その期間全体が言及時ということになるのである。しかし、結果の非可逆的残存や経歴といった場合、言及時としてとりあげられる時間は一つの期間をなさない。それで、④⑪のように、言及時が期間として捉えられることはない。従って、これらの場合、

④⑫その時までずっと死んでいる。

とか、

④⑬*今まで花子は子どもを生んでいた。

などということはできない。逆に言えば、結果の非可逆的残存の場合や、経歴の場合、言及時が(文脈的に潜在化しているにせよ)特定されていなければならないと言いうことができるであろう。このように、結果の状態の意味のなかでも、言及時の時間的性質が違うということがある。

なお、アスペクトの対立のない状態動詞などは恒常的なあり方として捉えられるので、あり方の時間的な両端が設定されず、従って、両端の断続がとりあげられないものであると説明できると思われる。以上、いろいろな観点から、スル対シテイルの対立の意味を考えてきたが、このように考えることによって説明できることを次に二つほど示したいと思う。

まず「死ぬ」のような、動きそのものの継続をあらわせない動詞の意味についてであるが、「死ぬ」があらわす事態が一点であるということに対して、シテイル形が開的区間をとりあげるということ

で説明できる。すなわち、一点的な動きの内部において、開的区間としての捉え方はできず、動きのあった後の結果の状態という事態の方をとりあげることになるのである。それで、反復にならない限り進行中のな——事態の展開していく内部を捉えるような——意味にならないのである。一方、スル形は、閉的区間をとりあげるので、事態が一点のでもいいのもちろんである。

次に継起性について考える。例えば、

④ 私は酒をのんだ。男が話かけてきた。

⑤ 私は酒をのんでいた。男が話かけてきた。

の二文を比較すると、④においては、二つのことがらが継起的におこるのに対し、⑤においては、二つのことがらが同時的におこるといふ違いが得られる。この違いは、「酒をのむ」出来事が、スル形なら、開的区間を捉えられて、それで完結してしまうのに対し、シテイル形なら、開的区間として非完結的に捉えられている、ということに求められると思われる。

スル形の完成相の意味が、閉的区間として出来事を捉えるという時、出来事のどれだけの部分が捉えられるのか、という問題も残る。

例えば、一時点成分とスル形が共起して、

⑥ 正午に昼食を食べた。

のようになれば、「正午」という非分割的な一時点において、出来事が完結的なもの、つまり閉的区間としてとりだされなければならぬが、そうになると、今度は「食べる」という事全体は、その区間の中に入っていないことになってしまう。しかし、ここで考えてみたいのは「⁽¹⁴⁾食べる」ということの意義である。「食べる」のような全体が一つの均質な動きからなっているものは、その始まりと

終わりの二点をそれぞれとりあげることができる。例えば、

⑦ 早く食べろ！

という時、「食べはじめろ」の意味と、「食べおわれ」の意味との二つがあるであろう。⑦の例では、そうした、始め、終わりという限定された点が問題となるのである。一方、「殺す」のように、過程をもっている、その変化のある一点だけがとりだされる動詞では、このような二通りの意味はない。それで、

⑧ 彼は正午に模型を組みたてた。

という場合も、変化の時として特定できる一時点だけがとりだされることになるので、問題はない。

本節では、完成相スル形対継続相シテイル形の意味は、事態のとりあげ方における閉的区間対開的区間の対立として説明できること、シテイル形が結果の状態の意味のとき、言及時を分出すること、などについて述べた。

四、テンスの対立

テンスの対立（ル形タ形）は、言及時が分出されない時は、そのまま、出来事時と発話時との先後関係によって決まる。ル形は、現在未来（非過去）を、タ形は過去をあらわす。

一方、言及時が分出される場合、その言及時と発話時との関係がテンスを決める。例えば、

⑨ 彼は去年留年している。

は、過去の出来事でも、テンス的には現在のことをあらわしている、ル形になっている。これは、言及時が現在となっている為である。

このように、主文末のテンスの対立を決める場合、二通りの場合

を考えなくてはならないのであるが、ライヘンバッハ(一九四七)のように、言及時の意味が曖昧になることはない。言及時を考える必要のある時においてだけ、言及時を設定するからである。

ここではテンスの対立の弱まる(なくなる)場合については考えていないことを断っておく。

五、時の成分の示すもの

ここで時の成分というのは、時を設定する成分ということである。設定された時が、何を指すのか、ということが問題になる。

基本的に、一つの述語に対して、設定されうる時は一つである。

例えば、次の④のように、複数の時成分が一つの述語に関わることはない。

④ 昨日は、五日前に金がなくなっていた

⑤ は非文である。

時の成分が何をあらわすか、という問題は重要である。単純なスル形の場合、

⑥ 列車は三時に出た。

⑦ 三時には、列車は出た。

のように、言及時を分出して考える必要もないので、時の成分は、出来事時をあらわすといえる。それで、⑥も⑦も、同じ意味とみてよいであろう。

ところが、

⑧ 列車は三時に出ていた。⁽¹⁵⁾

⑨ 列車は、三時には、出ていた。

では、二文の意味に違いがあるのではないだろうか。すなわち、「三

時」は、⑧では、「列車の出た時」という出来事時をさしているのに対し、⑨では、言及時をさしているのではないだろうか。そして、「列車が出た」時は「三時以前」だと解釈されるように思われる。

このように、シテイル形が結果の状態をあらわす時、時の成分がさすものは、出来事時であったり言及時であったりするのである。

次の⑩のように、シテイル形が、現在における経歴をあらわす場合、時の成分は、出来事時をもっぱらあらわすといえる。例えば、

⑩ 潤は三年前に研修をうけている。

では、「三年前」は「研修をうけた時」である。これは、言及時が発話時(現在)であることが文末のル形から決定されているためであると考えられる。

しかし、先の④のような場合、テンス形から言及時が決められるということはない。

このような場合、時の成分が示すものはどうして決められるのであろうか。そこで、次のように、時の成分の係り関係(時の成分のスコープの問題)として考えてみることにする。

時の成分が、出来事時をあらわす時、その係り関係は、

⑪ 列車は三時に出ていた。

のようになっていると考えられる。つまり、時の成分が「三時に出る」コトというように、動詞句内におさまっているのである。このような場合、時の成分と動詞句とが密着していなければならず、多く、「イツイツニ」というような形の時成分になる。

一方、時の成分が言及時をあらわす時、

⑫ 列車は、三時には 出ていた。

という係り関係になっているとみられる。つまり、「は」というような主題化をうけることによって、シテイル形という状態全体の時を設定することになるのである。⁽¹⁶⁾そこで、時の成分は、言及時をあらわすことになると考えられる。この場合、時の成分は、動詞句の中にとりこまれていたのではなく、シテイル形も含めたあり方全体を修飾している。

係りうけという言葉を使わず(一)でスコープを示すことになる、と

⑤⑧(56)は、

⑤⑧(三時に)出していた

という意味構造であるといえるし、⑤⑨(57)は、

⑤⑨(三時には)「出ていた」

という意味構造であるといえる。この時、発音的にも、「は」の後ポーズをとるのが自然であるが、スコープの違い(係り方の違い)の一つの反映であると思われる。

ここで述べたような時の成分の係り方の関係は、「は」の付加、ポーズをおくこと、の有無によってあらわされる、と概略いえるが、ほか、「し」という形になったりならなかったりする、「昼」、少し前、「朝」のような副詞的名詞は、「し」という形かどうかで時の成分の係り方のきれつづきがあらわされることがある。(また、語順も関連があり、文頭にくればきりはなされる傾向があると思われるが、微妙である。)

⑥⑩飛行機は、昼すぎに、着陸していた。

⑥⑪昼すぎ、飛行機は着陸していた。

という二文の意味を比べることで明らかになるであろう。

時の成分の係り関係という問題は、どうしても、文脈的な意味な

どの「見えない」条件によって、意味の判定が微妙になることもあると思われる。しかし、意味関係をさらに強力に決める条件もある。それは、

⑥⑫飛行機は昼には、すでに、着陸していた。

のように、「すでに、とくに」といったような副詞がある場合である。これらの副詞があれば、シテイル形の意味が結果の状態の意味としてまとめられてしまい、時の成分はシテイル形全体の時、すなわち、言及時をあらわすことになる。

なお、時の成分のあらわし方としては、「し以前に、しまでに、しまえに」などの形もあるが、とりあげた時より前に出来事がおこることをあらわすようである。例えば、

⑥⑬きのうまでに調査がすんでいた。

では、「調査がすむ」という出来事時が「きのうまで」という範囲でおこることをあらわし、「までに」は、全体で出来事の生起時をあらわしている。しかし、問題としてとりあげている時は「きのう」であるという側面もあって、「きのう」は言及時であるとも言える。つまり、出来事時を指定すると同時に、言及時もあらわすことになっていると言えるであろう(複合的時成分と呼べるだろう)。なお、言及時が分出しないう時、文末から決まる時はこの限りではない。以上、本節では、時の成分が何を示すかについて考察した。

六、意味構造の類型

最後に、スル、シテイル、シタ、シテイタといった意味構造についてまとめておくことにする。意味構造は、次のようになる。

以下、形態の側から、簡単に意味を検討して、説明の補足をする。

(i) シタ形
過去における閉的区間

㉔ あ、麦わら帽子がとんだ！
などは、完了とはみないで、直後の過去とみる。

(ii) シテイタ形

過去における開的区間（進行中・結果の状態）

シテイタ形が、過去における持続期間をあらわし、かつ、発話時直前までその期間があったという場合、例えば、

㉕ あ、忘れていた。（『今思い出した』）

のように、「今は違う」という含意をもつことが多い。あえて、その期間が過去のものであるということであらわすからである。

一方、経歴の意味のように、ひとたび出来事があると、以後のあり方が決まってしまうという場合、このようなことはない。逆に、論理的な意味関係は、過去、現在によって変わらないから、（言及時の意味は違うが、）

㉖ 彼は先月に結婚している。

㉗ 彼は先月に結婚していた。

のように、ル、タの交替ができる。

なお、いわゆる発見のタがつく例、例えば

㉘ ああ、戸があいてた！

などについては、ここでは扱わなかった。

(iii) スル形

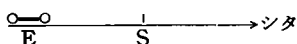
現在未来における閉的区間

動作動詞のスル形は、無標で未来をあらわすといわれるが、発話時という認識的な一点のなかに閉的区間が設定されえないから、現

<例>

ユウベ本ヲヨンダ

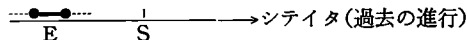
<過去>



（単純過去）

シタ

ユウベ本ヲ読ンデイタ



（過去の進行）

シテイタ

ユウベニハスデニ本ヲヨンデイ
タ

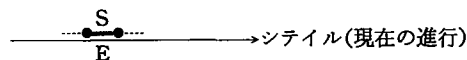


（過去の結果状態）

シテイタ

<現在>

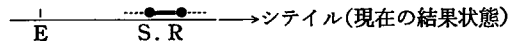
今本ヲヨンデイル



（現在の進行）

シテイル

ユウベソノ本ヲヨンデイル

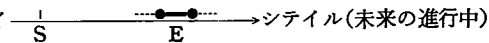


（現在の結果状態）

シテイル

<未来>

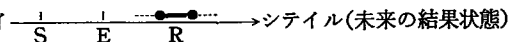
明朝9時ゴロ、手紙ヲ書イテイ
ルダロウ。



（未来の進行中）

シテイル

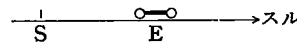
明朝9時ニハスデニ手紙ヲカ
イテイルダロウ。



（未来の結果状態）

シテイル

明朝手紙ヲカク。



（単純未来）

スル

在をあらわせず、未来をあらわすことになると説明できる。なお、未来のことは、予想、意志などのムードの色彩が色濃くなる。

(iv) シテイル形

現在未来における開的区間

現在、未来における進行中、現在、未来を言及時とする結果の残存、をあらわす。無標なら現在をあらわし、未来のことを示す成分があれば(有標)、未来をあらわす⁽¹⁷⁾。

おわりに

以上、本稿では、シテイル形の意味を再検討したうえで、スル対シテイルの意味を考え、区間のとりあげ方の開閉として説明できることを示した。そして、テンス、アスペクトを全体的にまとめ、どのような形式がどのような事態をあらわすのか、ということ、本稿なりの記述法によって示した。その際、SRE体系を本稿の立場なりに改めた(Rの設定など)。そして、時の成分が何をさすのか、という問題についても、係り関係から考えた。

ここでは、全体の枠組を検討しようとしたので、動詞(句)の具体的な意味内容などについて、特にふれなかった。「組織」ということを題につかったのも、このためである。また、スル対シテイルの対立以外のアスペクト形式についても、出来事内部に含まれる問題として、ここでは位置づけをしていない(シツツアル、シテアル等は、シテイルと同じ状態化形式である)。次稿に期したい。

(注)

(1) それで、客体変化をあらわす「戸をあけている」も、主体変化の「戸があいている」と同じく、結果の状態の意味に一義ある。

「戸を暫くあけている(戸||開)

「戸をかつて一度あけている(経歴)

「戸が暫くあいている(戸||開)

「戸がかつて一度あいている(経歴)

(2) 本文では、主体変化の例を挙げているが、客体変化の場合でも、三つの結果の残存の意味がある。

彼は戸を暫くあけていた。

彼は暫く本をちらかしていた。

彼女は太郎を生んでいた。

それぞれ、期間成分との共起のしかたに違いがあり、次のような現象がみられる。

○戸を暫くあけた

○本を暫くちらかしていた

cf. ×本を暫くちらかした

×太郎を暫く生んでいた

cf. ×太郎を暫く生んだ

それで、結果の維持、結果の半可逆的残存、結果の非可逆的残存の意味として、各々、主体変化と同じように位置づけることができる。

(3) Johnson (1977)、Smith (1978) など。Rの設定については Dowty (1919) の批判があるが、Dinsmore (1982) のような反論もある。

(4) 矢印は時間をあらわす。白丸は両端が切れ、完結的になることを、黒丸は両端がはつきり切れずに、非完結的になることをあらわす。数学の表記法とは少し違っている。

(5) 実際にどこまで続くか、ということは、言語の問題には関係がない。

(6) 大鹿(一九八二)は、

全態としてのコトは、コトの開始と終結を含むコトであり……

(九〇頁)と述べている。ただ、「開始」「終結」という概念は、一点的な出来事に對する説明に問題があると思われる。

(7) なお、一定の期間をあらわす場合のスル形対シテイル形の対立も、

三時から四時まで遊んだ

三時から四時まで遊んでいた

と、あらわすことができる。線の両端は、それぞれ、三時、四時をあらわしている。

(8) 言及時という発想はライヘンバッハ(一九四九)に負う。しかし、ここでは、設定する必要がある場合において設定するのであって、概念的な曖昧さはない。

(9) 結果の非可逆的残存の意味は、ここで問題にしているところでは、

(9)と同じ意味構造なので、具体的説明は省くことにする。

(10) 出来事の質に関係がないので、()であらわす。

(11) 例えば、⑭は、

あいた時 あいていた

とあらわされると思われる。言及時は、期間全体をあらわし、かつ、開的区間として、内部におかれていとみるべきであろう。

(12) 「今までに」としてしまうと、生起時点をあらわすから、期間をなさない。⑮は、「今まで、忘れていた」などと対照すると、期間のあるなしの違いがよくわかる。

(13) 例えば、

「芸術と実行」論争は、田山花袋——を発端としてはじまるともされているが、実は、それより四ヶ月も前に、この論争の口火を切るような論文を書いていたのだ。(『近代日本演劇論争史』菅井幸雄)

では、出来事時は、「それより四ヶ月前」、言及時は、「田山花袋(の論文発表)」の時ということになるが、このように、言及時は顯在的なことと、

——不可能ではない、「山口はGF(連合艦隊)長官の山本五十六が考えることまで計算していた。(『ミッドウェー戦記』豊田襄)

のように、顯在的ではなくても、文脈的に(描写の時の関係から)言及時がわかることがある。

(14) 変化のおこる時が、特に一点だけに位置づけられるのではない。

(15) この場合、言及時は、出来事時以後、発話以前である。例えば、「私が五時ごろ駅へたどりついた時には」などとあればわかりやすいかもしれない。

(16) 「は」の意味には、主題化することと(その場合は、スコープに影響を与える)、スコープを変えることなく、単に対比強調をあらわすだけということがあるようである。こうした「は」の意味については、文脈などの「見えない」条件に関わるところが大きい。今後検討する必要がある。

(17) 未来の時の成分がなく、ただ単に
あっている
などといえは、現在のことをあらわすことになる。未来のことをあらわすには、未来の時をあらわす時の成分が必要である。現在が無標、未来は有標と言える。この点、スル形と対照的である。

(参考文献)
大鹿薫久 1988 「未完了・完了・未来・過去——終止法の述語における」
——(天理大学『山辺道』26)
奥田靖雄 1977 「アスペクトの研究をめぐって——金田一的阶段——」
(宮城教育大学『国語国文』8)

紙谷栄治 1979 「終止用法におけるテンスとアスペクトについて」(『国語学』118)
紙谷栄治 1983 「助動詞の相互承接からみたテンス・アスペクト」(『同志社国文』)

金田一春彦編 1976 『日本語動詞のアスペクト』(むぎ書房)
草薙裕 1983 「テンスアスペクトの文法と意味」(『文法と意味』朝倉書店)
工藤真由美 1982 「シテイル形式の意味記述」(武蔵大学『人文学会雑誌』)

- 国広哲彌 1967『構造的意味論』(三省堂)
- 鈴木重幸 1979『現代日本語の動詞のテンス——終止的な述語について』『完成相の叙述法断定のばあい——』(『言語の研究』言語学研究会編むき書房)
- 鈴木重幸 1983『形態論的なカテゴリについて』(『教育国語』72)
- 鈴木重幸 1984『形態論的なカテゴリとしてのフンスベクトについて』(『金田一春彦博士古稀記念論文集』三才書房)
- 高橋太郎 1984『するとしたとも言えぬとき』(同)
- 寺村秀夫 1971『タ、の意味と機能——フンスベクト・テンス・モードの構文的位置づけ——』(『言語学と日本語問題』くろしお出版)
- 寺村秀夫 1982『テンス・フンスベクトのヨットの側面とモード的側面』(『日本語学』1・2)
- 寺村秀夫 1983『時間的限定の意味と文法的機能』『副用語の研究』明治書院
- 仁田義雄 1982『動詞の意味と構文』(『日本語学』1・1)
- 仁田義雄 1983『アスペクトの分析、記述に向けて』(『国語学研究』一五)
- 森山卓郎 1983『アスペクトの意味実現の原理について』(『国語学会春季大会発表要旨集』)

森山卓郎 1983『動詞のフンスベクトナルな素性について』(『待兼山論叢』一・二)

- Dowry D., 1979 Word Meaning and Montague Grammar, Reidel
- Dinmore J. 1982 The Semantic Nature of Reichenbach's Tense System, glossa 16-2
- Johnson M. 1977 The Syntax and Semantics of Kikuyu Tense and Aspect, Doctoral dissertation, the Ohio University
- Reichenbach 1947 Elements of Symbolic logic 記号論理学の原理 大修館
- Smith C. 1978 The Syntax and Interpretation of Temporal Expressions in English, Linguistics and philosophy 2 43-99 Reidel

(付記)

本稿は、私の修士論文「日本語のアスペクトの研究」の第一章をもととしています。宮地裕先生をはじめ諸先生方の懇切な御指導を仰ぐことができました。記して感謝いたします。